

世界の自然を遊び、 学んだ視野を日本の山岳環境に

磯野剛太さん

山岳ガイド協会の専務理事であり、アトラストレックの代表取締役であり、環境省自然公園指導員であり、国立登山研修所専門調査委員でもあり、全日本スキー連盟アドバイザーでもある磯野さんは、更に、長野県山岳ガイド資格制度のあり方等に関する研究会委員、安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター専門委員など、それはそれはたくさんのお仕事をなさっています。あらゆる角度から「山」と「自然」にアプローチしている磯野さんにお話を伺いました。(インタビューと文：張晶子)

◆どんなきっかけで「山」に出会ったのですか。

一父は教師でラグビーをやっていたのですが、二つ年上の兄と一緒によく山に連れて行ってくれました。中一の夏に、富山の両親の知人宅に兄と2人で行ったときに、地元の大学生に立山三山と剣岳に登らせてもらいました。折りしも登山ブームで、子どもだった私たちは、周囲の大人たちに親切にもされて、楽しい経験でした。

スキーも、中二の冬に、母の疎開先だった妙高の知人宅にお世話になって、アルペンもクロスカントリーも手ほどきしていただきました。その一家は、お嬢さん三姉妹揃ってオリンピック選手だったスキーの名家だったのです。樹林の中を滑ったりと、これも楽しい経験でした。

小学生の時は水泳と卓球、中学校ではバスケットボールをやっていましたが、中学時代には、友人を誘って、子どもだけで谷川岳や妙義山など山に行っていました。やらせてくれた周囲の大人には感謝していますね。子どもとしては生意気な子どもでしたね。生意気な世代だったとも言えますね。少し上の世代は人数も多くて競争も激しく、集団の力がありましたが、僕らの時代はより個人主義的になっていましたから、上の世代からは生意気とうけとられたでしょうね。

◆本格的な山登りは、どう始めたのですか。

一日比谷高校時代は山岳部に入り、昼休みには付近の石垣登りなどして、テラスと称するところで弁当を食べたり、学生運動の影響で何ヶ月もの休校があったので、山には7泊～8泊と行くこともできました。この頃から、単独で谷川岳一ノ倉沢や八ヶ岳大同心に登っていました。成蹊大学に入ってから、山岳部に籍を置き、9年間を過ごすことになりました。

大学では、一年おきに国内の山とバイト、翌年はヒマラヤと、たっぷり9年間も山岳部に在籍しました。芝倉沢出合いに山小屋があるので、小屋の整備に行っては、地元の

猟師さんにいろいろなことを教えてもらいました。山菜からきのこまで詳しくなりましたよ。南小谷のスキー場のバイトでは、ヒマラヤから持ち帰った紅茶をインド風に淹れて随分売ったり、インドカレーを作ったり、いろいろやりました。

◆ヒマラヤデビューは学生時代なのですね。

—20歳のときに日本山岳会に入りました。学生部ということではなく、日比谷高校山岳部の先輩の鹿野さんからインドヒマラヤ最高峰ナンダデヴィ（7816m）登山に誘われたのがきっかけです。明治生まれの大先輩から伺った、クラブの精神は、日本にはめずらしい個人の自立を感じさせるものがありました。1980年春には日本山岳会チョモランマ北壁隊に参加、8200mまでルート作りました。その夏にはマッキンレー（6191m）に隊長として参加し、頂上から1200m地点まで全員でスキーで滑降しました。82年は中国のボゴダ2峰（5362m・初登頂・隊長）、84年はカンチェンジュンガ（8586m）の縦走登山隊に参加して、中央峰に登頂することができました。88年の三国合同チョモランマ縦走登山では、ネパール側の登攀隊長としてサウス・コルまでサポートしました。

◆加藤保男さんと会社を創られたそうですが。

—大学を卒業する前年、加藤さんが設立した会社に入社しました。彼のヨーロッパでの経験から、クライマーは自らのクライミングの講演を巡業してまわるものという認識があって、講演以外に山岳映画の上映や、ガイドイング、更には加藤さんのサイン入りワインの販売などやっていました。加藤さんが82年の冬、エベレストで亡くなってからも5年ほど会社を守りましたが、その後アトラストレック社を立ち上げました。

◆日本の山岳ガイドの状況について思われるところはありますか。

—ヨーロッパのガイドも、現在のステータスを築くのに何十年もかかっています。日本の状況で言えば、都会のクライマー出身者と地元の地域ガイドのギャップを埋めるのに時間がかかっていますが、都会育ちのクライマーが地方に定着したり、地元ガイドの意識がオープンになってきていたり、最近ではレベルの融合が見られてきています。

◆ガイドさんたちは山の環境保護とはどう関わっているのでしょうか。

—ガイド協会では、研究課題を持って、その結果を社会に還元することを考えています。たとえば、オープン前の黒部立山アルペンルートでは、雪の中での様々なアクティビティの実験をしました。自然に対するインパクトを低く抑えつつ、安全なガイドイングをするには、グループの規模やガイドの人数をどうバランスすれば良いか、など、安全とローインパクトとビジネスのバランスを探る試みです。

ガイド協会は環境省傘下の社団法人で、自然公園指導員の数も100名以上と、一番多いことは意外に知られてないかもしれませんね。

トイレの使い方やゴミの回収、ローインパクトの問題などは、クライアント（顧客）と共に考えていくことだと思います。

日本の山岳ガイドも、それなりの報酬を得られるようになってきています。国の環境

政策がどの方向に進むかにも注目しながら、社会的に貢献する集団になって行くことを目指しています。

子ども時代からの、自由奔放縦横無尽とも言える自然体験の積み重ねを伺っていると、羨ましい限りでした。世界の山々での経験を生かし、日本のプロガイドさんたちのステイタスをより高めていっていただけるよう応援したいと思いました。お忙しい中、資料まで用意していただき、ありがとうございました。